

同一性と必然性

星野 徹*

水が元素ではなく、水素と酸素からなる化合物 H_2O であることが発見されたのは18世紀のことである。水が H_2O であるという18世紀以降の科学理論が真理であるとすれば、それは経験によって発見されたアポステリオリな真理である。しかし、実際に水が H_2O であるならば、そうであることは必然的である。

現在の科学理論が誤りであることが将来判明するということはあることである。実は水は H_2O ではなく、より複雑な構造の化合物であるのかもしれない。しかし、水は H_2O であるという近代科学の唱える説が本当ならば、水と見分けのつかない液体が存在したとしても、水素と酸素で構成されていなければそれは水ではないし、無色透明でもなく、飲んでも渴きが癒えないような物質が存在したとしても、それが H_2O であるならばそれは水である。世界には水らしくない水や、水と見分けがつかないにも関わらず水ではないような水もどきが存在しうるのである。

このように、アポステリオリで必然的な真理というものが存在すること、また、水と H_2O や金と原子番号 79 の物質のような自然種間の同一性に関する真理がそれに該当することを示したことはクリプキの功績である (Kripke, 1980)。クリプキはさらに、熱のような物質の状態や、表面色のような物体の可感的性質にも議論を拡張する。熱が分子運動であるならばそうであることは必然的なのであり、表面色が物質表面のカテゴリカルな性質であるならばそうであることは必然的なのである¹。だから、熱を感覚す

る器官を持った生物が存在しないような可能世界においても、物体を構成する分子がある一定の運動エネルギーを持っていればその物体は一定の温度状態にあるのであり、視覚器官を持った生命体がない可能世界や、現実の人間と色覚が反転した生命体が存在しているような可能世界においても、現実世界におけるポストと同じ表面特性を持ったものが存在すればそれは赤いのである。

しかし果たして、水や金のような物質と、熱のような物質の状態、さらには色や味のような物質の可感的性質を同列に扱うことができるものなのだろうか。

I 水と H_2O

水が H_2O 以外ではありえないということは、われわれは、水道の蛇口から出で来る液体が本当に水であるかどうか、また、プールの中に満ちている透明な物質が本当に水であるかどうか、特殊な手段による以外には確実には知ることができないということである。蛇口から出てくる液体が、無味無臭でも、 $100^{\circ}C$ で沸騰しても、 $1cm^3$ が $1g$ であっても、それは水ではないかもしれない。水のマクロ性質は水の偶然的性質にすぎないからである。それが水であるかどうか知りたければ、たとえばそれを電気分解して水素2容積と酸素1容積が得られるかどうか確かめてみなければならぬ。また目の前の物塊が本当に金であるかどうか確かめたければ、それが原子番号 79 の原子の集積であるかどうか調べてみるほかはない。

クリプキの発想を受け継いだジャクソンやチ

* ほしの・とおる

埼玉大学教養学部教授 哲学

「水」や「金」のような名辞は二種類の内包を持つという (Jackson, 1998, Chalmers, 1996, 2002)。現実世界における指示対象を決定する 次内包 (チャルマーズ) あるいは A 内包 (ジャクソン) と、現実世界における指示対象が確定した状況において、反事実的世界における指示対象を決定する二次内包、あるいは C 内包である。「水」の 次内包は、無色透明、無味無臭で、川や湖を満たしている物質を選び出す。そして、無色透明、無味無臭で、川や湖を満たす物質が H_2O であることが判明すれば、水は H_2O であることになるだろうし、無色透明、無味無臭で、川や湖を満たしている物質が XYZ であるような世界では、水は XYZ であるということになるだろう。方、水が現実世界において H_2O であることが判明したならば、「水」の二次内包はあらゆる可能世界において H_2O を選び出すことになる。水が H_2O であるならば、水が H_2O であることは必然的なのである。

「水」が無色透明、無味無臭で、川や湖を満たす物質を指すということを知るために、われわれは実際に川や湖へ行ってみる必要はない。「水」の 次内包をわれわれはアプリアリに知っている。だが二次内包はそうではない。水が H_2O であることは、科学的探究の末に明らかになったことである。水が H_2O であることが必然的だとしても、それはアポステリオリで必然的な真理なのである。クリプキのアポステリオリな必然性は、「水」と「 H_2O 」のように、それぞれの 次内包は異なるが二次内包が 致する名辞によって指示されるような対象に関して生じるのである。

ところで、ジャクソンはさらに、名辞の 次内包と二次内包が 致するか否か、われわれはアプリアリに知っているという (Jackson, p.52)。ある名辞が二次元的であるか否かということは、

現実世界がどのようなあり方をしようとして、そのこととは独立に知られるのであり、「正方形」や「独身男」は二つの内包が 致しているのに対して、「水」はそれらが異なる二次元的名前であることを、われわれは経験によらずに知ることができるというのである。それでは、「統合失調症」は 二次元的名前なのだろうか、それとも二次元的名前なのだろうか。また、「ペスト」や「のどあれ」はどうだろうか。

「ペスト」は「水」に似ているかもしれない。「ペスト」は、高熱や筋肉痛とともに、皮膚が黒くなり、数日のうちに死に至る病を指していたが、19 世紀後半にペスト菌が発見されることによって、ペスト菌によって引き起こされる病気を指すことになった。仮に悪魔によってペストの症状が引き起こされていたとすれば、「ペスト」は悪魔憑きを指すことになっていただろうし、特定のウィルスによってペストの症状が発症していたとすれば、ペストはウィルス性疾患であったことだろう。しかし、近代病理学の発見が真実だとすれば、ペストがペスト菌によって引き起こされることは必然的である。皮膚が黒くなり、高熱に苦しんでいる人がいても、その人の体内にペスト菌が侵入していなければその人はペストではないし、皮膚が黒くならなくとも、ペスト菌に感染していればその人はペストなのである。それに対して「のどあれ」は「水」よりも「独身男」に近い。未婚の男性は、どのような世界においても独身男であるのと同じように、のどがひりひりし、声がかれていれば、その人ののどは荒れているのである。細菌によるものであろうと、ポリープによるものであろうと、代謝異常であらうと、アルコールの摂り過ぎであらうと、寝不足であらうと、とにかくのどあれの症状が出ていればその人はのどあれなのである。それでは、「統合失調症」は「ペスト」と「のどあれ」どちらのカテゴリーに属す

るのだろうか。私にはわからない。私にはわからないが、この分野の専門家である精神病理学者ならば的確な答えを与えられるのだろうか。

現在のところ、統合失調症特有の症状群のうちの一つが現われていれば、その人には統合失調症の診断が下される。「統合失調症」は、名前は記述の束であるとする一般名についての記述の束説の好例であるように見えるだろう。しかし、将来「統合失調症」は「ペスト」と同じ運命をたどるかもしれない。統合失調症には共通の病因があることが発見されるかもしれない。その暁には、DSMの掲げる症状のほとんどを満たしていても、その病因が見つからなければ、その人は統合失調症とはみなされないことになるだろうし、症状の出ない統合失調症といったものの存在も認められることになるだろう。「統合失調症」が「ペスト」の同族であるのか症候群名であるのか、おそらくまだ誰にもわかってはいないのである。

これは病名に限ったことではない。古代世界で、水と並んで世界を構成する四元素とみなされていた「土」や「火」や「空気」はどうだろうか。それらは二次元名辞なのだろうか、そうではないのだろうか。「石」や「砂」はどうだろうか。これらの物質名が二次元的であるか否かということ、われわれがア prioriに知っているようには私には思えない。われわれが知っていることといえば、「独身男」のような定義的意味だけによってその指示対象が決定される名辞が二重の内包を持つことはない、ということだけである。

アポステリオリな必然性をめぐるクリプキの議論は、チャルマーズやジャクソンのものほど洗練されていないが、その根底には、ものの存在についての素朴で強固な直観があるように思われる。それは、クリプキの固有名論により鮮明に表れている。クリプキによれば、アリス

トテレスについて、古代ギリシャの偉大な哲学者であるということしか知らない人でも、アリストテレスは、もしかしたら、哲学者としてではなく、平凡な市民として生涯を終えていたかもしれない、と考えることができるという。そう考える人は、「アリストテレス」によって、だれであれ古代ギリシャの偉大な哲学者であるような人物を指しているのではなく、「アリストテレス」と呼ばれる当の男のことを指しているのである。同じように、われわれは、オバマが大統領選挙で負けていたかもしれない、オバマは政治家になっていなかったかもしれない、オバマの声と風貌は現実とは違っていたかもしれない、などと考えることができる。われわれは、オバマについて、彼が大統領であることと、彼の風貌と声しか知らないとしても、そのように想像して考えることができる。そのような場合でも、われわれはオバマと似た人物について考えているのではなく、あのオバマ自身の身の上について思いを巡らしている。それは、われわれが「オバマ」によって、現実のオバマが持つ性質の群ではなく、「オバマ」と呼ばれるあの男自身を指しているからである。そして、あのオバマの誕生の時点にまでさかのぼり、その後その身に生じたかもしれない出来事に思いをはせてみるのである。だから、クリプキは固有名は記述の束ではないと言い、また、個体についての反事実的状況を質的に記述することは不可能であると言うのである。これに対して、ルイスのようなヒューム主義者は、われわれがオバマが大統領選に負けた状況を想像するとき、厳密には、大統領選挙に負けた以外はオバマと同じ性質と経歴を持つオバマの対応者 (counterpart) について考えているのだ、ということだろう (Lewis, 1986)。

クリプキのこうした実体主義的世界観は水や金のような自然種にも及ぶだろう。水の諸性質

がいずれも水の本質的性質ではないとすれば、水とは水的性質の群ではなく、水的諸性質を持つものかである以外にはないからである。

ところで、水についての懐疑が意味あるものとなったのは、水が H_2O であることが発見された 18 世紀以降のことであるというわけではない。水が H_2O であることを知らない人でも、コップの中の液体を見つめながら、これは水なのだろうかかと疑ってみることができるだろう。水のサンプルを示されることによって「水」が何を指すかを知った人は、あのと時の物質と今日の前にあるこの物質は果たして同じ種類のものなのだろうか、と疑念を抱くかもしれない。渴きを癒そうとこの液体を口にしたら人は、突然もがき苦しむかもしれないからである。見た目が同じでも、同じ種類の物質であるとは限らないのである。また、見た目も味も効能も、何も変わらなくとも、それでも二つは別のもかもしれない。容器に入れて超高速で攪拌すると、一方は何の変化も示さないのに、他方はほんのり赤く染まってくるかもしれない。あるいは、爆発するかもしれない。さらに、現実世界には存在しない世界外性質 (alien property) を持った物質に対して、二つは異なった反応を示すかもしれない。カプグラ症候群の患者は、親しい人物がある日突然別人と入れ替わったと訴えるという。今朝、家を出て会社へ向かった夫と、身体的特徴も、声も、癖も、性格も、何も違わないのに、帰宅して目の前に現れた人物は彼女にとって赤の他人なのである。個人に対するこうした態度はあるいは病的かもしれないが、水や金といった自然界に存在する物質に関する限り、カプグラ的態度は全く合理性を欠いているというわけでもないのである。宝石の鑑定士や薬物の鑑識官が生計を立てて行けるのもそのためである。

水と見分けのつかない物質を前にして、この

ように、これはいったい水なのだろうか、とわれわれが疑うことがありうるということは、われわれが目の中の透明な液体を、そしてまた水と呼ばれる物質を、単なるマクロ性質の束とはみなしていないということである。目の前の物質は、ある状況のもとでは、水と呼ばれる物質とは異なった振る舞いをするかもしれない。その時、異なった振る舞いをするのは、無色透明性や無味無臭性の束ではなく、無色透明、無味無臭な何ものかである以外にはないだろう。また、水がマクロ性質の束ではなく、マクロ性質を実現する何ものかであるからこそ、あの無色透明な水が無色透明でないこともありえただろうか、などと、反事実的状況における水の様子についてわれわれは思いを巡らすことができるのである。そして、水が H_2O であることが発見されたとは、他ならぬ H_2O が水のマクロ性質を実現していることが発見されたということなのである。だから、目の前にある物質が H_2O であるならば、それは、どのような状況においても H_2O 以外ではありえないのである。

アポステリオリで必然的な真理が存在するという、それまでの哲学的常識と真っ向から対立するクリプキの主張が、指示の因果説の当否とは独立に、大方の哲学者によって瞬く間に受け入れられるようになったのは、哲学者たちもこうした実体主義的、あるいはロック的な自然観を暗黙のうちに共有していたからではないかと私には思われる。

II 傾向性

水が H_2O と同 であるように、赤さや甘さのようなものの持つ性質も、ものの何らかのミクロな構造と同 なのではないだろうか。そして、それらが同 ならば、そうであることは必然的なことなのではないだろうか。

クリプキも実際にそのように考えている。「黄色性」(yellowness)は、「正常な状況下でわれわれに黄色の感覚を引き起こす物体の顕在的性質」という記述によってその指示が固定されるのであり、その指示対象が、物質表面の特定の反射率であることが判明したならば、その反射率を持つ物体は、夜中でも、だれも見えていなくとも、光のない世界でも、視覚機能を持った生命体が存在しない世界でも、さらに、正常な人間とは色覚機能が逆転していて、晴れた空が黄色く見え、月が青く見えるような生命体が存在している世界でも、やはり黄色いのである(Kripke, p.140, n.71)。黄色や甘さのような可感的性質についてのこうした議論の妥当性を次に検討することにするが、その前に、傾向性について考えておきたい。

砂糖を水に入れてかき混ぜれば、ほどなく砂糖は溶けて砂糖水が出来上がる。同じように、塩もアンモニアも炭酸も水に溶ける。これらは水溶性という共通の性質を持っている。ガラスやティーカップはボールをぶつけたり床に落としたりすれば壊れてしまう。ガラスもティーカップも脆いのである。水溶性や脆性のような傾向性は一定の状況下でのみ顕在化する。したがって、ある物質がどのような傾向性を持つかは見ても触れてもわからないが、それを知るためにそれらのマイクロ構造を調べてみる必要があるというわけでもない。ものがある傾向性を持つか否かを判別するための最も信頼のおける方法は、それを傾向性が発現すると考えられている環境のもとにおいてみることである。水溶性ならば水に入れてかき混ぜてみればよいし、脆性ならばそれに衝撃を加えてみればよい。内部構造がどうであれ、水に溶ければそれは水溶性の物質であるし、壊れてしまえばそれは脆性を持つ物質である。ある傾向性には、その傾向性特有のマイクロな基盤性質があるかもしれない。し

かし、そうした場合でさえ、物質がその傾向性を持つか否かを判別するために、そのマイクロ構造を知ることは必要ではないし、それで十分というわけでもない。

たとえば、金属原子の電子は自由に動き回る。こうした自由電子が金属の持つ展延性の基盤となっていると言われる。この世界では、展延性を持つ物質の外延と自由電子を持つ物質の外延が完全に一致するものとしよう。それでも、展延性の物質が自由電子を持つことが必然的であるというわけではないだろう。たたいたり引きのばしたりして変形を加えることができるにもかかわらず自由電子を持たないような物質が存在する可能世界はあるだろう。また、自由電子を持つ物質が展延性を持つということも必然的なことではないだろう。電子が自由に動き回っているにもかかわらず、圧力を加えても変形しなかったり、圧力を加えると破壊されてしまったりするような物質を想像することは可能であるように思われるからである²。自由電子があるが無かろうが、圧力を加えて変形すればその物質は展延性を持つのである。展延性の本質は、特定の基盤性質を持つことではなく、圧したり引いたりすれば延びることなのである。

ものが展延性や水溶性のような傾向性を持つか否かが、ものが特定のマイクロ構造から成るか否かによってではなく、ものが特定の因果的効力を持つか否かによって決定されるのは、われわれのようなマクロな存在にとって、ものを持つマクロな因果的効力のほうが、そのマイクロ構造よりも、実用的にはるかに重要だからである。フグの毒性と蝮の毒性と青酸カリの毒性には共通のマイクロの基盤は存在しないかもしれない。しかし、それらはわれわれを死に至らしめるという共通の因果的効力を持っている。われわれが、それらがマイクロの共通性を持つかどうかと

は無関係に、それらを毒物として 括りにし、慎重に取り扱うのはそのためである。

この点において、「展延性」や「水溶性」や「脆さ」や「毒性」などの傾向性名は、「オバマ」や「水」よりも「アメリカ第 44 代大統領」や「のどあれ」に近いと言ってよい。それがだれであれ、アメリカで 44 番目に大統領に就任した人物がアメリカ第 44 代大統領であるように、それがどのような基盤性質によって実現されていようと、水に入れてかき回せば溶けてしまう物質は水溶性を持つからである。傾向性名は名前ではなく名前のふりをした記述なのである。

展延性と熱を比較してみるの興味深いことである。金属は、電気は通すが光は通さない。そして、金属の持つこの二つの性質も、自由電子の存在に起因するという。展延性、電気伝導性、不透明性、三つの性質の基盤はともに自由電子の存在なのである。しかし、これら三つの性質を総称する名前をわれわれは持ってはいない。金はあくまでも展延性と電気伝導性と不透明性という三つの異なった性質を持つとみなされている。溶岩は様々な因果的効力を持つ。近づく者に熱の感覚を引き起こし、雪や氷を溶かし、周りの空気を暖め、近くの物体を膨張させる。それは溶岩が高温だからである。溶岩は四つの性質を持つのではなく、高温状態という溶岩の性質が四つの仕方で発現したのである。熱が平均分子運動エネルギーと同 だとすれば、熱の性質が四つの仕方で発現したとき、分子運動が四つの仕方で伝搬したのである。ここで、分子運動が伝搬しない世界を考えてみよう。それは、熱力学第二法則が成立しない世界である。そのような世界が存在することは論理的には可能であることだろう。その世界では、分子が激しく運動している物体に触れても熱く感じられず、その物体に雪や氷を近づけても雪も氷も溶けず、その物体があたりの空気を膨張させるこ

ともない。それでもその物体の温度は高いのだろうか。クリブキならば、分子運動がいかなる因果的効力を発揮することがないような世界でも、激しい分子運動をしている物体の温度は高い、ということだろう。熱と分子運動が同 ならば、そうであることは必然的なことだからである。

しかし、電子が自由に動き回ることと分子が激しく運動することの間にいったいどのような違いがあるというのだろうか。電子の運動と分子の運動の間には、前者がよりミクロの現象であるということ以外には、存在論上の違いはないのではないだろうか。それならば、圧しても伸びない物質が展延性を持たないように、触っても熱く感じられず、氷や雪も溶かさなような物体は、ミクロ状態がどのようなものであっても、熱くはないと言うべきなのではないだろうか。

それにもかかわらず、「熱」が固定指示子で、あらゆる可能世界において同 の対象を指示するという見解がある程度の説得力を持つのは、おそらく、熱が可感的性質の 種だからである。

われわれは熱を直接感じるができる。そして、直接指示することができるように思われる。熱が何かを知りたいければ熱湯に手を入れてみればよい。他にもないこれが熱である。熱く感じられるこれ、熱の感覚を引き起こすこれが人々が「熱」と呼んでいるものなのである。そして、これが実は分子運動であるという近代科学の言い分が正しいとすれば、熱が分子運動以外のものであることは不可能である。これが熱の感覚ではなく、かゆみを引き起こしたとしても、あるいは何の感覚も引き起こさなくとも、これはやはり熱なのである。『熱』は『それが何であれ、われわれに熱の感覚を引き起こすもの』を意味するのではない、熱の感覚を引き起こすという熱の持つ偶然的性質によって、われ

われは『熱』の指示対象を固定したのである」とクリプキが言うとき、クリプキの念頭にあるのは、おおよそこのような状況なのだろう。

水や金のような物質ならば、確かにわれわれはそれを直接知覚することができるし、直接指示することができるだろう。私は水そのものを見、水そのものに触れている。私が見、私が触れているものが水なのである。水が H_2O ならば、私は H_2O を見、 H_2O に触れているのである。また、私は水が無色透明ではないこともありえただろうかと考えてみることもできる。そのとき、私は、水そのものが無色透明ではない可能性について考えているのであり、 H_2O が無色透明性を実現しない可能性について考えているのである。しかし、水ではなく、水の持つ性質である熱の場合にも同じことが言えるのだろうか。私が熱湯に手を入れたとき、私は分子運動を直接知覚しているのだろうか。そして、私が分子運動を直接知覚しているのなら、これが熱く感じられないこともあるのだろうか、と想像してみると、私は「これ」によって分子運動そのものを指しているのだろうか。

Ⅲ 可感的性質

私の目の前には白い壁がある。この壁はいつも白く見えている。私の体調や眼の具合が悪い時には、黄色く見えたりすることもあるのかもしれないが、これまでのところこの壁が黄色く見えたことはない。おそらく、幸いにも私の身体はずっと正常だったのだろう。クリプキが正しければ、「白さ」とは、正常な状態で白さの感覚を引き起こすものを指すのであり、私が、白昼、白い壁を前にしてこれが白だと言うとき、私は白さそのものを直接指している。そして、そのとき指された白さが、実は壁の特定の反射特性であったということが明らかになったとす

れば、それはどのような現れ方をしようとも白い。体調不良のため、いつもの壁が黄色に見えたとしても、壁の表面構造に変化がなければやはり壁は白いし、光の特性が現実世界とは異なっているような世界でも、これと同じ表面構造の壁はやはり白い。ちょうど、どのような性質を発現させるようと、それが H_2O である限りそれは水であるのと同じことである。

確かに私には白い壁が見えている。そして、これが白さなのだ、と何度もつぶやいてみることもできる。また、これが黄色く見えることもあるかもしれない、と想像してみることもできる。しかし、私が「これが黄色く見えることもあるかもしれない」と想像するとき、私は、この壁が黄色に見える状況を想像しているのであり、「これ」は視覚体験を引き起こしているところの壁を指しているのである。私には、壁ではなく、この白さが黄色に見える様を想像することができない。「これ」が白さを指すならば、その「これ」が別のように見えることはありえない、と強く私には感じられる。

味覚を例にとってみよう。チョコレートを開口に含むと口の中に甘さが広がる。そして、「これは甘い」と言ってみる。「甘さ」とは甘さの感覚を引き起こすものことなら、「これは甘い」と言ったときの「これ」は甘さを指してはいない。私に生じているのは甘さの感覚だけであり、それとは別に、甘さの感覚を引き起こしている何ものが私の味覚に現われているわけではないからである。「これ」が甘さの感覚以外の何かを指すとしたら、それは、甘さではなくチョコレートである。次に、私は、これがもう少し苦く感じられることもあるのだろうか、と想像してみる。私は、同じチョコレートが味覚の異常でもう少し苦く感じられるような状況を想像しているのである。方、甘さそのものを指して、この甘さが別様に感じられることがあるだろうか、

としてみることは、私にはできない。やはり、私の味覚体験には、味覚体験の変容を通じてそのままとどまることができるようななものも与えられてはいないからである。同じ甘さがさまざまな味覚的現れ方をすることができる、と言えるためには、さまざまな現れの背後にそのままとどまるものが私の味覚体験のうちにも与えられていなければならないが、私の味覚体験のうちにはそのようなものは何もないからである。甘さの感覚から対象性質としての甘さを分離して、それが苦さの感覚を引き起こすことを想像するなどできない相談である。だから、私には甘いものが苦く感じられる様を想像することはできるが、甘さそのものが苦く感じられる様を想像することができないのである。この甘さが苦く感じられる様を想像しようとしても、できることは、甘さの感覚の代わりに苦さの感覚が生じる様子を想像することだけである。

しかし、甘さが物質のマイクロ構造であることが明らかになれば、マイクロ構造はそのまま、甘さの感覚だけが変容して行く状況を想像することができるようになるのではないだろうか。

いや、それでも事情は変わらない。甘さの感覚を引き起こしているのが、糖分子の構造特性であることが判明したとしよう。「甘さ」が「白さ」の同族ならば、物質の性質としての甘さは糖分子の構造特性と同であることになるだろう。チョコレートを口に含んだおかげで私の口の中には甘さが広がっている。では、この甘さが糖分子の構造特性なのだろうか。そうではない。糖のマイクロな特性がこれを引き起こしているのである。私が「これが本当の甘さというものだ」などと言ったとしても、私は糖分子の構造特性を直接指示したことにはならない。そして、色の場合も同様である。

目の前の壁が今も同じように白く見えている。それでは、あの白さは壁の表面のマイクロ構造で

はないということなのだろうか。あれは一定の仕方配列された分子の集積ではないのだろうか。そうではないと私は思う。われわれは、物質のマイクロ構造を想像するとき視覚的に想像してしまう。そして、白い光景に、拡大された分子模型の像を文字通り重ね合わせたうえで、あれは実は特定の仕方配列された分子の集まりなのだ、と考えようとする。しかしこれは不当な重ね合わせである。視覚像以外ではこのような重ね合わせへの誘惑は起こらないだろう。たとえば、聴覚像ではこのような想像は端的に不可能である。

私は、今度は CD でベートーヴェンのピアノ・コンチェルトを聴いてみる。音は特定の音色と高さと大きさを持ったものとして私に現われてくる。今私に聞こえているこの音色と高さと大きさの音にスピーカーの振動板の聴覚的振動像や音波の聴覚的振動像を重ね合わせるなどではしない。これはスピーカーの振動板の振動でもなければ、音波でもない。もちろんピアノの弦の振動でもない。振動板の振動が空気を振るわせ、その結果これが生じているのである。これが振動板の振動と同なのではなくて、振動板の振動がこのような聴覚体験を引き起こしていると言うべきなのである。

私は、音楽を聞いているさなかに、振動板に触れてみることもできる。そのようにして振動板が振動しているありさまを触覚的に知ることもできる。そのとき指先に感じられる震えの感覚と振動板の振動が同でないのは言うまでもない。スピーカーの振動が震えの感覚を生み出したのである。同じ振動が、私の聴覚と触覚に異なった仕方現われているのであり、同じ物理現象が同の私に異なった仕方知覚されているのである。私がいる場所に犬や猫がいたならば、同じ振動は、今度は、犬や猫の聴覚に違った現れ方をするだろう。私と犬と猫と、それ

ぞれの体験の質は異なるだろうが、しかし、同じ出来事がそれらを引き起こしているなら、三者は同じ対象を知覚している。犬や猫はそのことを知らないが、私も犬も猫も、一緒に、振動板の振動を聞き、音波を聞いている。この場所に、犬や猫ではなく、聴覚に変調をきたした私自身がいるような状況もありえたことだろう。そのような状況に私が立ち至ったとしたら、この震えの感覚を引き起こしている出来事が今よりも高い音の感覚を引き起こしていたかもしれない、と振動板に触れながら思ってみることは私にもできる。そうした仕方であれば、同様の音に別の音感覚が伴う様子を私は想像することができる。しかしそれは、これが別様に聞こえる様子を想像しているのではない。これは振動ではないからである。

色や音や味の感覚をわれわれは直接指すことができる。これは赤く、あれは黄色い。これは低い音で、あれは高い音である。これは甘く、あれは苦い。それらの感覚を引き起こす物体のミクロ状態については今ではよく知られているだろう。色の感覚を引き起こすのが物質表面の反射特性であり、音の感覚を引き起こすのが物質の振動であり、あるいは音波である、というように。そして、色とは物質の反射特性であり、音とは、物質の振動、あるいは、音波である、と言われるようになる。しかし、その場合でも、われわれはものの反射特性や振動を直接指しているわけではない。ものの性質としての色や音が、色の感覚や音の感覚を引き起こす物質の物理的性質であるという見解が正しければ、われわれは、そうした色や音を直接指示できないことになるのである。

これは別に奇妙なことではない。空を見上げて、「あれは飛行機だ」と言う人は、正確には「あれは飛行機の見え姿だ」と言おうとしているのである。すると、飛行機の音を聞いて「あれは

飛行機だ」と言う人は、「あれは飛行機の聞こえ姿だ」と言っていることになるだろう。あれは飛行機の見えであり、不自然な言い方ではあるが、あれは飛行機の聞こえなのである。しかし、それは、その人が飛行機の見えを見、飛行機の聞こえを聞いているということではない。見えているのも聞こえているのも飛行機である。飛行機を見ているとき飛行機は視覚的に現われ、飛行機が聞こえているとき飛行機は聴覚的に現われている、それだけのことである。そして、色や音も飛行機と同じである。私が白いものを見て「あれが白だ」と言い、高い音を聞いて「あれは何と高い音だ」と言うとき、「あれ」は、白の見えと高い音の聞こえをそれぞれ指しているのである。色の見えや音の聞こえといっても、われわれが色を見、音を聞くとき、われわれが心的な色の像を見、心的な音の像を聞いているということではやはりない。われわれは、目の前にある赤の観念を見、耳の横にある高い音の観念を聞いているわけではない。胃が痛い時、私は、胃に生じている痛みをさらに感じているわけではない。胃痛が生じているだけである。同じように、赤の感覚が生じ、高い音の感覚が生じているのである。そして、ずきずきする痛みとしくしくする痛みの違いが痛みの質の違いであるように、赤の感覚と黄色の感覚の違いは視覚体験の質の違いであり、高い音の感覚と低い音の感覚の違いは聴覚体験の質の違いである³。

しかし、いずれにしても、白壁を見、チョコレートを口に含みながら、「これが白さや甘さであるならば、これはどのような現れ方をしても白さや甘さなのである。たとえこれが赤く見え、これが苦く感じられる可能世界においても、これは白く、これは甘いのである」などと考える人がいるとすれば、その人はかなり人工的な想定をしているのである。白の感覚によって表面色としての「白さ」の指示を固定するという発

想はそれほど自然なものではないと言わなければならない。

では、見えではない白さや聞こえではない大きな音は存在するのだろうか。

ものは様々な仕方で現れる。水は私の視覚と触覚と味覚には異なった仕方で現れる。そのとき、私に現われているのは同じ水であり、同じ H_2O である。私に見えているのも、私が手を浸しているのも、私が飲んでいいるのも、水であり、 H_2O である。水とは、そのような様々な仕方で私に現われるものである。だが、それだけではない。水は $100^{\circ}C$ で沸騰するし、火を消すこともできる。今私に現われているのは水の側面にすぎない。だから、私は、水が現実とは異なった姿を見せる様子を想像できるのである。

可感的性質のミクロの基盤もやはり様々な仕方で現れることがあるだろう。振動板の振動は私と犬と猫に、また私の触覚と私の聴覚には異なった感覚印象を与えることだろう。しかし、それは必ずしも音として姿を現すわけではない。振動板の振動が私と犬と猫の聴覚によって捉えられたとき、それは音として姿を現す。より正確に言えば、振動板の振動によって聴覚体験が引き起こされたとき、その聴覚体験は、外で音がしているということを表象する。しかし、私の触覚によって捉えられたとき、私は推論によって音がしていることを知ることができるだけである。私が振動板に指先で軽く触れるとき、私は振動を知覚していると言ふことはできるが、音を知覚している、あるいは、音に触れていると言ふことはできない。同様に、ものの色は視覚以外の感覚器官によって知覚されることはないし、ものの味が味覚以外の仕方で感知されることはない。色に触れることはできないし、味を見ることもできない。

壁が白く見えるとき、壁は白いものとして私に現れている。壁の反射特性が私には白さとし

て現れているのであり、私は壁の反射特性を壁の白さとして知覚しているのである。壁の反射特性を触覚的に熱の感覚、あるいはざらざらした感覚として感知する生命体がいたとしても、壁の色が熱の感覚やざらざらした感覚を引き起こした、とは言わないだろう。それらの感覚を引き起こしたのは色ではなく壁の表面構造である。その生命体は色を知覚したのではなく、表面の反射率を、熱として、あるいはざらざらしたものと知覚したのである。

嗅覚の対象が揮発性の分子であるとしよう。たまたま私が空気中に浮遊する分子を視覚的に感知する能力を獲得したとしても、私にとって、においが色になったわけではないが、かといって、においが見えるようになったり、同様ににおいが先程は嗅覚的に、今は視覚的に姿を現すようになったりしたわけでもないだろう。私は、空気中に漂う分子を先程までは嗅覚によってにおいとして、今は視覚によって形態的に捕らえているのである。

ものがさまざまな相のもとにわれわれに姿を現すときの、その特定の相 (aspect) がものの可感的性質である。表面色とは視覚的に現れる限りでのものの側面であり、音とは聴覚的に、味とは味覚的に現れる限りでのものの側面である。物質表面の特定の反射特性は、さまざまな因果的効力を持つことだろう。それが色感覚を引き起こしたときのみ、そのものの色が知覚されたと言ふことができるのである。「 H_2O の集まりは水である」や「原子番号 79 の原子の塊は金である」、あるいは「色は物質表面の反射特性である」や「音は物質の振動特性である」は不自然ではないのに対して、「物質表面の反射特性は色である」や「物質の振動特性は音である」が不自然に聞こえるのはその証左である。

ものが色という性質を持つためには、それがわれわれに色感覚を引き起こす力を持つという

ことが必要であるだけでなく、その力が発現する条件が世界の中で成立しているものでなければならぬ、と思われてくる。世界が色付きの世界であるためには、特定の表面構造を持った物体が存在するだけでなく、さらに、光と、色覚機能を備えた生命体が存在する必要があるのではないだろうか。だとすれば、「赤さ」や「甘さ」は、「いらいらさせる」(irksome) や「快適な」(comfortable) のような、ヤブロが反応依存的 (response-dependent) 概念と呼ぶものの仲間であることになるだろう (Yablo, 2002)。快適なものとは、それが何であれ、人や動物を快適にさせてくれるものであり、生命体がない世界には快適さという性質も存在しない。私にとっては 40℃のお湯は快適であるが、生命体が存在しない世界で 40℃のお湯が快適さを持つことはない。また、私が 45℃のお湯を好むようになれば、40℃のお湯は、私にとって、快適さという性質を失ってしまうだろう。「快適な」や「いらいらさせる」があまりにも主観的に思われるならば「毒性」を挙げてもよい。地球上の生物が青酸カリに対して耐性を獲得したとすれば、青酸カリは毒物ではなくなるだろうし、生物がない世界で青酸カリが毒性を持つことはないだろう。生き物がない世界には毒も薬もないのである。

それでも、表面色が物質表面の反射特性と同であるならば、そうであることは必然的である、という思いは強く残るかもしれない。赤さが特定の反射特性であるならば、それが黄色く見えても青く見えても、その反射特性を持つものは赤いのだ、と言いたい気持ちを消し去るのは難しいだろう。夜になってもポストが赤くなくなるわけではない。それなら、光のない世界でもポストは赤いはずではないだろうか。人間の視覚機能が突然変化し、ポストが緑に見えるようになったとしても、ポストの色が変わった

のではなくて、色の見え方が変わったのだとみなされることだろう。それに、地球の生命体が絶滅した瞬間にポストが赤くなくなるとは考えられないことである。やはり、現実の日本のポストと同じ表面構造を持ったものは、いかなる状況においても、またいかなる可能世界においても赤いと言うべきなのではないだろうか。

「ポストは赤い」と言うとき、いったい私は何を言いたいのだろうか。ポストは赤く見えるということだろうか。それとも、ポストは特定の物理的性質を持っているということだろうか。物質が色を持つとはどのようなことなのだろうか。また、世界が色付きであるためには何が必要なのだろうか。特定の表面構造をした物質が存在するだけで世界は色付きになるのだろうか。光も必要なのだろうか。あるいは、さらに眼を持った生き物もいなければならないのだろうか。それとも、実際に色の感覚が生じていなければならないのだろうか。では音の場合はどうなのだろうか。特定の振動特性を持った物質があれば世界には音が存在することになるのだろうか。その物質が実際に振動していなければならないのだろうか。空気も不可欠の要素なのだろうか。さらに、耳のついた生物が存在する必要もあるのだろうか。これらの問いに明確な答えがあるようには私には思えない。

クリプキは、神が世界に痛みを生じさせるためには、痛みに対応する神経系の状態——C線維の発火——を持った生物を創造するだけでなく、さらにその生物に、C線維の発火を痛みとして感じさせるという仕事をしなければならなかったと言う。神の世界創造を想像してみると、痛みと痛みの現れには区別がないという、われわれの持つ痛みについての概念が鮮明になったのである。痛みとC線維の発火の関係については、論争が続いているものの、おそらくクリプキの言う通りなのだろう。さら

にクリプキは、神が世界に熱を創造するためには分子運動を創造するだけで十分だったとも言える。果たしてそうだろうか。確かに、水ならば、神は水素と酸素を創造した後、それらを2対1の割合で結合するだけで事足りただろう。また、球をつくるためには、適当な物質を球の形に丸めればよかっただろう。しかし、水や金のような部の物質と形のような次性質を除けば、神が世界創造の際に何をしなければならなかったか、われわれに知りうることはそれほど多くはない。

たとえば、神は土や石を創造するために何をしなければならなかったのだろうか。仮に火星に水らしき物質が見つければ、それは水であるかないか、二つに一つであることだろう。しかし、火星に土状の物質があれば、それは土であるか、そうではないのか、どちらかであるということになるのだろうか。土のようなマイクロへの還元が不可能であるような物質は、それを他の物質から区別する本質的性質といったものを持ってはいない。「土」は「水」と違ってマクロ性質の束として分析されるべきなのだろう。しかし、統合失調症とも違って、どれほどの数の性質を持てばそれを土とみなせるか、などという明確な土性の基準をわれわれが持っているわけでもない。だから、われわれは神に土を創造してもらいたければ、土のサンプルを神に示すしかないのである。

性質の場合はまた事情が異なる。性質はその主たる因果的効力によって同定される。正常な状況下で赤く見ればそのものは赤いし、水に入れて溶ければそれは水溶性の物質である、というように。そして、水溶性や脆性のような傾向性や、質量のようにカテゴリーカルな基盤を持たない性質は、因果的効力がその本質となることだろう。そのような性質を創造するためには、神はその因果的効力が発揮されるような状況を

整備しておく必要がある。たとえば、世界に一つしかものがなければ、そのものが質量を持つことはないだろう。質量をその物体に付与するためには、神は物体をもう一つつくらなければならないのである。一方、ある種の性質名に関しては、因果的効力を介してその指示対象が固定されるのかもしれない。そのような場合は、特定の基盤を持つことがその性質の本質であるとみなされることになるだろう。神がそのような性質を創造したければ、その基盤性質を持ったものをつくりさえすればよい⁴。では、可感的性質はどちらに属するのだろうか。この問いに明白な答えはないだろう。個々の性質名の使用法について、われわれに明細な規則があるわけではないからである。音は前者に近く、熱や色は後者に近いとすることはできるのかもしれないが、可感的性質は二つの極の間を状況に応じて揺れ動いているというのが実情なのだろう。アポステリオリで必然的な同性が成立すると無条件で言えるのは、「明けの明星」と「宵の明星」のような単称名間をのぞけば、おそらく、「水」と「H₂O」や「金」と「原子番号79の物質」のような物質名と理論的名前の間に限られるのである⁵。

注

- 1 正確には、「温度は平均分子運動エネルギーである」と言うべきなのかもしれないが、クリプキにならって本稿では温度と熱を明確に区別しないことにする。それでも、論旨には影響を与えないものと思われる。
- 2 基盤性質と因果的効力の間関係は偶然的なものであると思われる。詳しくは星野(2006)を参照されたい。
- 3 これは知覚の副詞説と呼ばれるものである。知覚体験が表象機能を持つことは確かであるが、それは後天的なものであると思われる。体験の質としてのクオリアは本質的に表象内容であるという表象主義の見解とそれに対する批判、ならびに、クオリアと知覚対象の

関係については、星野（2004）を参照されたい。

- 4 質量にはカテゴリカルな基盤がないことについては星野（2006）のなかで論じている。
- 5 本文の「明けの明星」と「宵の明星」は記述ではなく、純粋な名前である。「虎」や「猫」のような自然種に関するクリプキの議論は検討してこなかった。私には虎や猫をめぐるクリプキの議論がよく理解できない。クリプキの心脳同一説批判にも触れることはできなかったが、クリプキが再興したデカルト流の想定可能性論法（*conceivability argument*）やジャクソンの知識論法（*knowledge argument*）に対してこれまで提出されてきた反論はいずれも成功していないように思われる。詳しくは、星野（2007）を参照されたい。

文献表

- Chalmers, D. J. (1996), *The Conscious Mind*, Oxford University Press.
- Chalmers, D. J. (2002), “Does Conceivability Entail Possibility?”, in T. Gendler and J. Hawthorne (eds.).
- Gendler, T. and Hawthorne, J. (eds.), (2002), *Conceivability and Possibility*, Oxford University Press.
- 星野 徹 (2004)、「表象主義とクオリア」『埼玉大学紀要 教養学部』第40巻 第1号。
- 星野 徹 (2006)、「実体、性質、因果性」『埼玉大学紀要 教養学部』第41巻 第2号。
- 星野 徹 (2007)、「経験することと知ること」『埼玉大学紀要 教養学部』第43巻 第1号。
- Jackson, F. (1998), *From Metaphysics to Ethics*, Oxford University Press.
- Kripke, S. A. (1980), *Naming and Necessity*, Harvard University Press. (『名指しと必然性』、八木沢、野家訳、産業図書)
- Lewis, D. (1986), *On the Plurality of Worlds*, Blackwell Publishing.
- Yablo, S. (2002), “Coulda, Woulda, Shoulda”, in T. Gendler and J. Hawthorne (eds.).